

F A T E / 神のいる場所

1

式まではまだずいぶん間があったが、新しい生活に備えて、8月の初めから恭臣がマンションに越した。

真新しい家具。アイボリーのカーテン。さすがにモデルルームのようにはいかなかったけれど、何もないがらんとした空間を、少しずつお気に入りのインテリアで埋め尽くしていく作業は楽しかった。

料理は相変わらず苦手だったけれど、可愛い食器を見かけると、ついつい買い込んでこへ運んでしまう。恭臣は呆れた顔をしながらも、何度も繰り返される模様替えにつきあってくれた。

「結婚、か……」

今は恭臣一人が住んでいるこの部屋で、いずれ自分も暮らすことになる。

そんな感慨に浸りながら、知香はリビングの床に座り込んでいた。

ニューヨーク出張から戻った翌日から、恭臣は休む暇もなく仕事に出ている。数日間、片付けられることなく放置されていた旅行鞆を見かねて、知香は片付け始めた。

かろうじて洗濯物と仕事書類を取り出してあるだけで、あとのものは出張から帰った時のままの状態だ。

恭臣は自分で希望して海外事業部に配属されているようだが、あんまり忙しいのも考えものだと呆れながら、知香は荷物の整理を始めた。

どこに何をしまえばいいのかは、わかる。捨てていいものと、そうでないものの区別も

つく。

式まであとひと月。つきあい始めて間もない頃に決めた結婚だったが、少しずつ、恭臣との距離は近づいていると思った。

「パスポートは……通帳と一緒にいいのかな」

筆筒の引き出しを開けて、赤い表紙のパスポートをしまおうとして……知香はふと、手をとめた。

それを何げなくパラパラとめくったのは、別に何か意図があったわけではなかった。仕事であちこち出かけている恭臣のパスポートを、ただ、見てみたかっただけだ。自分のパスポートは、大学時代に友達と行ったグアムのスタンプが押しただけだったから。

上司も一緒だし、観光もできないよと恭臣は言っていたけれど、やはり何だか羨ましかった。

「ニューヨーク。……いいなあ」

先日の出張のスタンプを見つけて、知香は呟く。

その赤いインクをなぞった指が、そのすぐ下の消印の上で、ぴたりと止まった。

『CANADA DORVAL』

……遼のいる、モントリオールの空港の名前だ。だが、そのスタンプが、そこに押しただけである理由がわからなかった。

予定より、一日遅れて帰国した恭臣。

会議でも長引いたのだろうと、思っていた。出張のついでに遼の様子を見に行ってくれたのなら、当然、知香に話してくれるはずだ。知香や両親がどれほど遼のことを気にかけているか、恭臣はよく知っているのだから。

『DORVAL』

その小さなスタンプがどんな意味を持つのか、知香にはわからなかった。どんなに考え

でも、わからなかった。



…暑すぎる夏だ。

振り払っても振り払っても押し寄せてくる、焼けた空気。

だが、息苦しいのはこの暑さのせいだけでないことに、恭臣は気づいていた。

『今日、一日だけ…なかったことにしてもらえますか』

記憶から消さねばならないはずの、あの一夜。

封じ込めていた気持ちを、幻のように揺らいでいた想いを、あのとき現実のものに変えてしまった。

いま心に、火がついたように焦がれている。

自分は馬鹿だ。だが、いったいどうすれば良かったのか。

四方をふさがれた道に立たされているような気がした。そしてその道を閉ざしたのは、他でもない自分自身だ。

本当は、ひどく簡単な道のりのはずだった。ただ素直に目の前にいた遼のところまで歩けば良かった。

それなのに自分は背を向け、別の道へ歩みだしてしまった。お互いのために、それが正しいと信じていた…。